

「教育実習体験レポート」

[私立中学校・高等学校 理科]

私は 2025 年 6 月 2 日から 6 月 14 日までの 2 週間、大阪の明星高校にて教育実習を行った。理工系の学生として、普段は研究や実験が中心の生活を送っていた私にとって、「教える」という立場に立つこの実習は、新鮮でかつ多くの学びにあふれた経験となった。

最初の数日は、授業準備や指導案の作成など、教員としての基礎を学ぶ日々だった。中でも印象に残っているのは、人権教育や LGBTQ についての講話、職員朝礼での心構えなど、授業以外にも教師が担う責任の広さを体感したことである。「教える」ことは単に知識を伝えることではなく、生徒の成長を支え、社会とつながる姿勢を育むことでもあると感じた。

授業では主に物理基礎の「落体の運動」を担当した。生徒が中学 3 年生だからか、授業内での問いかけに対する返答は多く、教えた内容も生徒はしっかりと聞いてくれていた。しかし、授業時間を終えてみると予定していた内容の半分ほどしか教えることができていなかった。生徒の理解度を気にして、ゆっくり教えすぎるあまり、ペースがみだれ、このようなことになったのだと考えた。授業の分かりやすさと授業のペースの両方を確保することがこの教育実習中に一番難しいと感じた部分だった。

また、授業見学をさせていただくと、授業スタイルが先生によって全然違うのがとても印象的だった。先生方それぞれに板書の仕方や資料の使い方、話し方に個性があり、それでもどの授業も成立しているという事実は、教員の「型」に縛られない柔軟性を表しているようだった。私は、iPad で作成した図やプリントを配布する形式をとったが、それを活用する中で、自分なりのスタイルを模索しながら授業を進めていく過程は非常に楽しく、同時に責任の重さも感じた。

実習最終日には自分で計画した授業を完全に一人で担当し、生徒に対して自信をもって説明ができたとき、「教える」ことの難しさと達成感を強く実感した。同時に、日々の授業準備や生徒指導を平行してこなしている現職教員の先生方のすごさを痛感し、教師という職の難しさを実感した。

この実習を通して、私は教師という職業が単に知識を伝える存在ではなく、学習のサポート役であり、生徒の成長を見守る存在であり、そして生徒一人一人の人生に関わるという責任のある職業であるということを深く理解することができた。

将来、私が実際に教壇に立つことになるかどうかはまだわからないが、この2週間で得た経験は、今後の人生において必ず生きるものだと確信している。教育実習は、教職の現実を知るとともに、自分自身の価値観を見つめなおす非常に貴重な機会であった。